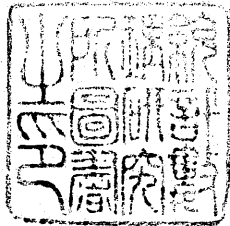


T 02
N 69
14

日本における統計学の発展

第 14 卷

話 し 手 兼 子 宙
 聞 き 手 岡 本 英 雄



1981年1月20日(火)

人材カレッジにて

ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

岡本 これは、日本における統計及び統計学の発展のヒヤリングということが始まった研究ですけれども、統計あるいは統計学そのものについてのお話は、いろいろな先生方からお伺いしたので、きょうは、その周辺分野の一つである社会心理学、あるいは、産業心理学の方面での統計的手法、あるいは、もう少し広く、社会調査、そういうものの日本への導入、またその発展について、その過程にずっと立ち会ってこられた兼子先生にお話を伺いたいと思います。

兼子 心理学への統計数理導入について、心理学の中にもいろいろな分野があります。そこで、最初に、心理学の分野の中に、数学的、あるいは統計手法的な方法が入ってきたのはどんな分野かという話を、一般論で申し上げたいと思います。

心理学の始まりは、医者や物理学者の間から興ってきたので、最初から数学との関係がわりとありました。たとえば感覚の問題で、ウェーバー・フェヒナーの法則のように、感覚弁別の問題を数式化した形に持っていく数理モデル的なものがかなり入っていたのです。それが、実験心理学の分野のいろいろな実験の仕方や、実験したデータの数量化の問題について、かなり突っ込んだ形で、精神物理学（サイコフィジックス）と称して、数理モデルというか、数理的な取り扱いをすることが、かなり進んでまいりました。

もう一つの分野は、初期の時代の心理学で、数理的方法を発展させた一番主なるものだと思いますが、人の能力の遺伝や差異の研究から、知能検査などのテスト法が

発展してきたことです。

このように、知覚、感覺の弁別問題と、もう一つは、人の能力の個人差測定、あるいは、各能力間の相関関係を調べるなどの、いわゆる能力心理学、あるいは「差異心理学」ともいいますが、これは遺伝の問題が絡んだ分野がありまして、それが、いろいろな統計手法を取り入れてきました。

その相関分析から、知能の因子説というのが出てきます。これはアメリカでの話ですけれども、最初は学者の間で論争があり、いろいろな分析の仕方がそこで開発されるという形で、相関分析のやり方がだんだん進んできました。そして、サーストーンから始まるいわゆる因子分析法が発展し出したのです。

少しおくと、社会調査的な問題から、測定尺度法が生まれてきます。それは、心理学の場合には、実験心理の場合で測定といっても、「こちらの方が大きい」、「こちらの方が弱い」などと、主観的な判断を量化していく問題があったわけですが、社会心理学の分野では、人々の主観的判断を統計的に処理して、これを尺度のようなものに当てはめていく、そうした尺度法が出だしてきております。

これまでの展開は、第2次大戦前までに熟してきたところですが、これを、重立った学者の名前で挙げると、最初は、ウェーバー、フェヒナー、ヘルムホルツなど。ヴントにも相関分析ぐらいまではあるのですが、アメリカへ渡って、ティッチナーが、実験のいろいろな手法をかためた人です。

1850年ごろ、イギリスで、フランシス・ゴルトンが、

人間の遺伝の研究のために、人の体型の測定をやり、これを家系で調べる大きな調査研究をしました。それを記念して、ロンドン大学に「ゴルトン研究所」がつけられ、この研究所の2代目の所長にピアソンが就任しました。

このとき、ゴルトンの弟子のスピアマン(1863~1945)が、同じロンドン大学に在任しており、ピアソンとスピアマンは、大いに議論を闘わせました。スピアマンは、知能の相関研究をたくさんやりました。また、「スピアマンの列位差法」といって、相関係数の簡便法を発明したり、非常に詳しい知能の因子相関分析をやった人です。

実は、広島大学から日大の教授になられ、先年亡くなられた、心理学今の長老の古賀行義先生は、大正10年11月から大正13年3月まで、アメリカとイギリスへ留学され、最初の1年はアメリカに、あとの1年余りは、ゴルトン研究所に腰を据えて、ピアソン所長の研究室で、統計数理的な資料分析を学ばれました。同時に、同大学の心理学教室のピアソン教授にも学び、彼の息子のエゴン・ピアソンはゴルトン研究所の助手をしていたので、親しくした由です。エゴンは統計数学者になりました。

アメリカでは、同じくゴルトン研究所で育った人に、コロンビア大学のキャテルがあります。彼は、アメリカの差異心理学、あるいは、テストの研究の中心的な人物です。そこでサーストンが育ったということになっております。

イギリスでは、どちらかというとも知能の相関分析が主だったわけですが、アメリカでは、応用的な色彩が強くなり、テスト研究が非常に盛んになりまして、イギリスとはちょっと違った発展を、キャテルのところでした。

るわけですよ。

サーストンという人は、カーネギー技術大学の出身で、この教授もし、数学にも強かったわけですが、キャテルのところで心理学をやって大成した人です。イギリス側でやったことと、アメリカで発展させたものがまとまってきて、いわゆる因子分析というものができ上がったといえましょう。

サーストンの因子分析の本で、一番基本的なものといわれているのが「ベクターズ・オブ・マインド」ですが、これが1905年です。同じく、社会調査的な尺度法を書いた「セオリー・オブ・アティチュード・メジャーメント」は1929年です。

それ以降もいろいろな発展があるわけですよ。たとえばサーストンの尺度法から「ガットマンの尺度法」が生まれ出されたのは、戦後に入るといいます。あるいは、サーストンのところで集大成されたものを非常に一般化させたという意味では、心理測定の方法論を集大成し、それを本に書いて普及させた人として功績があると思うのは、アメリカではギルフォードです。ギルフォードは、もちろん戦前からその方の研究をしていますが、それがずーと浸透したのは、むしろ戦後に入っただと思います。

そこで、日本ではどのような状況であったのかということですが、日本の心理学の導入はかなり早いのですが、実験心理学が本格的に始められたのは、大正年間に入ってから、松本亦太郎教授が、東大及び京大に心理学実験室をつくられたからです。氏の「心理学十講」(大正12年)の中で、いまの相関分析の方法がすでに述べられております。

既述した古賀先生は、大正4年の東大心理学の出身で、

松本先生の弟子であります。この人が、戦前では、心理学における数理的な手法の紹介者であり、ご自身で実際に研究もし、発展させもした、一番すぐれた人だと思えます。東大経済学部にも学んで、大正9年に経済学士にもなり、大正10年に名古屋高商の産業心理学の講師になり、欧米へ留学したわけです。

古賀先生の自叙によりますと、松本先生から、「心理学十講」に述べられた知能の相關研究をやれといわれて、卒業論文で手付け、大正7年に「知能相關の研究」をまとめて本を出しました。これが、心理学の数理的研究に手を始めた始まりということなのです。

古賀先生と同期生で、後に教授になりました岡部彌太郎先生は、教育心理学の専攻で、昭和7年に「教育測定法」という本を出した。関西の方では、大伴茂先生が、昭和6年に「教育測定の原理及び方法」を出した。この年代に入ると、教育測定分野の本がかなり出てきております。だが、大正年代では、まだこの方面のものはあまり知りません。古賀先生が、「心理学研究」などの雑誌に載せていた程度のものであります。

私は、昭和3年に東大心理学科に入学しました。私の不確かな記憶では、教育測定法の中で、平均はこう出す、相關はこう計算する、順位法はこういうものだという程度のことは、増田惟茂助教授や岡部助教授から、講義を聞いたたり、教わったり、本を見たりして学びましたが、だれの本が、たかを、的確に覚えていません。

当時の心理学では、まだ、いわゆる少数例の解析や検定の方法は、昭和の始まりごろには、日本の心理学界の中に入っていないか、たといえると思えます。

古賀先生は例外的です。ノ年半もゴルトン研究所に留学したのが大正10年で、このころは、ゴルトン研究所が最も盛んな時期でありました。ピアソンとスピアマンがロンドン大学に2人ともおって、共に相関分析的な測定問題を研究して、見解は対立していた。互いに分析の手法をいろいろ変えて議論を闘わしているという盛んな時代です。アメリカからサーストン初め多くの学者が集まっていたちょうどそのときに、先生は留学していたのです。

古賀先生は、学会の研究発表は深いものがありますが、啓蒙的な紹介書をお書きにならなかつた。1927年(昭和2年)に「ゴルトンの人体測定学的資料の最近の整理について」を、「教育心理研究」に発表しています。また、「検査心理学と相関心理学」を、1932年に「教育科学叢書」(岩波書店)の中に書かれています。また、1934年(昭和9年)、「心理学研究」第9巻に「競技に対する態度の測定」という論文を書いています。これは、アンケート調査にサーストンの手法を適用した研究です。

当時のいまノ人の大物は、東京教育大の田中寛一先生です。後に田中研究所をつくらせて、多くの教育テストやいろいろなテスト法をそこで研究し、出版しました。今日でも、テストの関係では一番の出版社です。田中寛一先生は、大正15年に「教育的測定学」をあらわしています。

田中先生は、大正10年に古賀先生と一緒にアメリカに留学し、イギリスにも行って、ゴルトン研究所にも学んでいます。戦前の心理学における統計数理的な手法を、浸透あるいは普及させた人としては、この人を一番に挙

げらるべきでしょう。「教育的測定学」を大正15年に、「教育的統計法」を昭和13年に出しています。

岡部彌太郎東大教授の「教育測定法」、久保良英広島文理科大学教授の「知能測定法」が、昭和17年ぐらいにあります。

古賀先生は1935年(昭和10年)、「応用心理学研究」に「因子分析法略解」を発表しました。これはサーストンの因子分析法を紹介されたものです。これがサーストンの因子分析法を日本に紹介された最初のもので、ただ一般にはあまり関心が持たれなかつたように思います。

ただ、当時の広島文理大の心理学専攻者の中には、広島高等師範で数学を専攻した人が何人もいました。これは、古賀先生が高師も教えたことの影響によるものと思います。それで、広島文理大学では、因子分析法を、学生の卒論で取り上げる人もいました。その中で、特に数理的な才能があった松本勝君が、因子分析法を大いに研究しました。この人は、戦後に広大の助手になりましたが、惜しいことに若死にしておりました。

私は、昭和7年から海軍技術研究所へ入り、海軍の各科兵員の適性テストとか、訓練法などの研究をしておりましたので、テスト研究に関連する数理的な手法に、常に留意していました。その間に、田中先生などの指導も受けましたし、古賀先生の研究には注意を払っておりました。「因子分析法略解」についても勉強しました。

サーストンの「ベクターズ・オブ・マインド」が1935年に出版されましたが、海軍で、私ども、極力洋書を買うことに努力をしておりましたので、戦前に私どもの手元へ入って来ました。これを一生懸命読んだ覚えがあり

ます。

終戦間際ごろ、海軍技術研究所に、牧田稔君や安藤公平君（後に日大教授）がいました。

その後、松本勝君は古賀先生の弟子ですから、古賀先生から因子分析法を学んだ人ですが、海軍潜水学校の教官になりました。終戦2年前ぐらいのことです。そして、潜水学校から海軍技術研究所の私どものところに、勉学のために派遣されてきました。5カ月ほどもいましたので、その間に、こちらは因子分析法を学びました。

私どもの実験心理研究部には「統計班」というのがありました。そのころの統計計算は人海戦術ですから、人手が大変です。ちょうど女子の徴用が始まったので、第三高女の生徒さんたちから、この調査班で使ってもらいたいと頼まれて、20人ほど働いていました。そこで、女子大出の、心理学出の姉さん格の人を2〜3人つけて組織をつくって、人海戦術作業班がつけられました。

そのころの研究部には、心理学出身の若い研究員がたくさんおりました。その中に、牧田稔氏（戦後に世論科学協会理事長）、安藤公平氏（戦後日大教授、教育測定法の専攻）がいて、この統計班を担当していました。

そこで、牧田先生は、因子分析法を用いて、非常に膨大な研究作業を始めました。戦後に、オズグッドのセマンティック・ディファレンシャル法が出ましたが、牧田君の構想はほぼそれと同じでありまして、日本の人格表現の形容詞をたくさん集めて、その言葉の間の相関係数を取り、それを因子分析するという、とにかく膨大な研究でした。

まず相関表のマトリックスは、縦横100欄ぐらいある

ものです。その因子分析の計算も手集計でするのですから大変です。今日のコンピュータ計算とはわけが違います。

これもやはり終戦間際のことですが、東大の医学部の増山元三郎先生が、1943年（昭和18年）に「少数例のまとめ方」という本を出しました。もう紙もない時分ですから、何部つくられたか知りません。戦後にちゃんとした本になっています。同じ年に、佐藤良一郎先生（現在世論科学協会会長）が、「数理統計学」を出されました。

牧田君はこれらに強い関心を持ち、これを技研の中でも徹底させなければいけないと、その本のコピーをつくることを、増山先生を訪問して許可を得たり、わからない点を教わったりして、本のコピーをつくり——青焼きのコピーだったのですが、それをテキストに「牧田講師」が、心理学出身で予備士官になって配属されてきた若い人人に講義をしたのを、私は覚えています。

戦前には、心理学の中に、ほとんど検定の概念はなかったと思います。増山さんの「少数例のまとめ方」の中には、 χ^2 検定などいろいろな形の検定がありました。また、実験計画法が述べられていました。実験計画法は、私どもには非常に新しい考え方でありました。今後はわれわれの実験研究にすべてこれらを採用すべしとしましたが、その時間もなく終戦になりました。

終戦間際には、尾高邦雄氏、清水幾太郎氏など社会学の人々の協力で、社会調査的な仕事を始めましたが、これも、実際にはあまり進まぬうちに終戦になりました。これに参加した研究員の中から、戦後に、久保良敏、池内一、牧田稔の3氏を中心に、戸川行男氏、尾高邦雄氏

とで世論科学協会をつくることになりました。

戦前は、社会調査がやれるような状況ではなかったわけです。私も、終戦時に社会的調査をやり始めると、憲兵隊から文句がありました。社会状態を調査すること自身がタブーだったのです。

戦前でも、農林統計の方面では、生産物調査の場合に、サンプリング法など統計学が導入されていました。だが、心理学の調査ではまだ十分に理解されていませんでした。戦後になって社会調査が始まって、ようやくサンプリング法なども確立してきたのです。この辺からは、牧田先生が話すことにまらしましょう。

戦後には、心理学の中で数理分析を用いることが大きく発展しました。東大の田中良久教授、東京教育大の岩原新九郎教授などがその先導者でありましたが、最近、相次いで亡くなられてしまいました。それで、既述の牧田稔氏と慶応大学の印東太郎教授あたりには、戦後のことは聞いてください。

以上です。

岡本 兼子先生が直接関係した分野の産業心理学について、戦後のお話を少ししていただけたらと思うのですが。

兼子 戦後の私は、労働省や人事院で、行政の仕事を数年して、研究も数理もなかったのです。

岡本 広島へ行かれたのは何年ですか。

兼子 終戦後6~7年してからです。広島大学へ行って、産業界の関係でモラル調査をして、その因子分析をして、学会発表を1~2しました。

また広島にいる間に、ミシガン大学の社会調査研究所に、フルブライト研究員で1年参りました。そこで、カ

トーナの全国サンプルの市場調査の仕事や、調査分析の方法などを学んできました。これを世論科学協会で役立てようと考えたのです。

いまノッ、同研究所のグループダイナミックスセンターのハラリー講師が、グラフセオリーのグルダイ研究への応用という小さな解説書をつくらたのを、以前に手に入らせていましたが、簡単過ぎてよくわからないでした。ちょうど林知己夫氏がミシガン大に来ましたので、同君を案内してハラリーを訪ねて話を聞き、資料ももらいました。それでも私にはあまりよくわからなかつたのですが、後に、早稲田大学の生産研究所で、OR関係の数学者の五百井教授にお願いして、少し教えてもらったり、研究してもらったりしました。しかし、これは、アメリカでも心理学の方面であまり発展しないようです。岡本 先ほどのお話で、幾つかお尋ねしたいと思います。

海軍技術研究所では、もっぱら人海戦術というお話でしたが……。

兼子 統計計算の関係では。

岡本 手回しの計算機というお話がありました。

兼子 タイガーです。

岡本 タイガーは戦前からあったんですか。

兼子 戦前からずっとありました。計算尺とタイガーです。そろばんはもちろん使っていましたけれども、タイガー計算機というのは、指でカリカリッとやるやつです。海軍技術研究所では電動式になりました。電動式はどういう型なのか。そのころには自分では計算しなくなりましたので、覚えていません。

岡本 東大社会学の研究室は、われわれが入ったころま

で、計算尺とタイガーですから、進歩はあまりないですね。

兼子 あと、カードシステムというて、ザーッと川みたいに流れていくやつ。

岡本 ソーターで分ける。

兼子 統計数理は、ほとんどソーターでやっていた。

海軍の中では、パンチしてカードにつくって云々というような形のものはやっていませんでした。そういうものを使っていたところといえば、統計局とか、銀行はやっていたようですが、一般的には、ソーターすら使っていなかった。カードのホールソート、穴をあけて、棒を差してやる方法はあったようですが、私どもは使いませんでした。全部手集計です。カードを分類するのも、全部目と手でやりました。

岡本 外国の影響は主として英・米ということでした。戦前のほかの学問は、ドイツの影響が強いわけですが、心理学は……。

兼子 心理学は、理論面ではドイツがリードしていました。スタートはW・グントでしょう。それからイギリスにも行き、アメリカに渡って発展し、アメリカとドイツが並列しているか、こうでいたわけです。産業心理とか教育心理などの応用面では、アメリカがずっと盛んでした。実験心理や理論心理では、ゲシュタルト・サイコロジーなどと、ドイツの方が優位だったのです。

岡本 高木貞二先生の講義などで聞くと、アメリカでも勉強されたけれども、ドイツの影響もかなり強いようですね。

兼子 そうですね。あの人はアメリカのティッチナーの

ところで勉強なされたのです。

岡本 そうですね。

兼子 戦前の心理学では、ドイツの方がアカデミックには主流といった感じがありました。哲学などの影響でしょうね。昭和に入るころには、実力的にはアメリカの方が上だったと思います。ナチスに追われて、ゲシュタルト派の学者なども皆アメリカに移ってしまったのですから。

岡本 海軍にいらしゃったわけですがけれども、技術研究所では、そういう学者の研究だけでなく、採用、配置といったところへの実際の応用を、いろいろやっていたわけですか。

兼子 そうですね。それは私どもが入る前に、航空兵だとか、特に兵隊関係のテスト、大正7~8年ぐらいから—第ノ次大戦のときにアメリカがアーミーテストその他で心理学を大いに活用したという話が日本に伝わってきて、それに刺激を受けて、松本亦太郎先生が、海軍の依頼で建白書を出しておるんです。それを基礎にして、大正7年には海軍の中に、ごく少人数のものですけれども、実験心理研究班というのができました。

大正の終わりごろから、海軍大学へ入るかわりに、士官に、毎年ノ人ずつ東大で心理学を学ばせました。この人たちが海軍技術研究所の中に実験心理の研究室を設けて、通信兵の採用テストなどの仕事をしてきていました。

私が海軍の技術研究所に入ったときは、こうした前任者が5人ぐらいいました。われわれよりも10年ぐらい先輩の人たちです。この士官たちは、時局がだんだん緊迫してきて、海軍も拡張し出すと、士官を技術研究所に置

いておくわけにいかない。しかし、適性研究の仕事を全くやめるわけにもいかぬというので、これを文官に切りかえるとして、最初に私が入ったのです。そこで、以前からの継続の仕事がありました。それが、兵員の関係だけでなく——技術研究所は、本来が海軍工廠の関係ですから、「今度は産業心理関係もやれ」ということで、要望がふえてくることもありまして、だんだんに研究メンバーをふやし、組織も拡大することになりました。

岡本　そういうふうにルーチンとしても適性検査みたいなものがある、そのことは、ほかへの普及みたいなことでは影響あったんですか。

兼子　われわれがやっていることを、一般の学界その他へ広げていく効果がどれくらいあったかという点では、あまりなかったと思います。学界はアカデミックで、応用の特殊部門にあまり関心がないですから。ただ、終戦ごろになると、きわめて大ぜいの心理学者たちの協力を受けるようになりました。また、海軍の予備士官として、大学の心理学専攻の学生が、私のところに30人ほど配属されました。その人々は、戦後にもよく連絡をし、協力もし合う面もあります。この中から、戦後の心理学界にすぐれた人たちが多く育ちました。

岡本　陸軍にも同じような機関があったんですか。

兼子　昭和16年ごろ、海軍が航空適性を土浦で大きく始めたころに、陸軍も適性研究をやらなければと、豊原恒男氏が頼まれて、急いで始めました。海軍の方は、大正年代から始められていた違いがあります。

岡本　社会学の分野ですと、戦争中は、軍隊組織の研究はほとんどなくて、むしろ被占領地といいますか、中国

とか、海南とか、仏印とかでの普及調査といえますか……。
兼子 宣撫工作員。

岡本 そういう形での社会組織の研究みたいなのがあつたわけですけども、心理学の場合は、国内でむしろ適性とか、モラルなんか……。

兼子 すでに少し述べましたが、最終段階になって、もう技術的な研究をしてもどうしようもない。終戦対策を考えなくてはならぬという話が出てきて、東大の高木先生と、労働法の末弘巖太郎先生のお二人を中心に、私はその世話役で、心理学はもちろん、哲学や、歴史や、社会学や、経済、政治の社会科学系の一流学者の先生方大ぜいを囑託研究員にお願いして、戦争心理対策本部という組織をつくりました。2つ3つの研究グループが、実際の調査や研究に着手はしましたが、成果もないままに終戦になりました。

岡本 一般への普及という点ではあまり大きな影響ないとしても、戦後の人材養成という点では功績があつたのですか。

兼子 養成に役立ったかどうか。人材を散らさないで、研修の便宜を与えたぐらいのことはあつたと思います。その人たちは、一時は「海軍の残党」といって、心理学の関係では、大学を問わず各方面に広がって活動していました。

日本の心理学の中の数理統計の応用や研究の水準を総括評価してみると、イギリスは、ゴルトン研究所のように、みずから開発したのですから、非常に力があります。アメリカは、そこから教わって始まっているのだが、実際の研究活動の上ではイギリスより上でしよう。日本で

は、知識の導入や紹介の点では、あまりおくれずに消化して来たと思います。しかしながら、実際の適用や開発研究という面は弱いものです。教育関係で、教育測定法はかなり普及した知識になっていきますし、入試テストなどは普及しています。戦前でももちろんテストはあって、体力測定みたいなものは、実施面でもある程度いってました。海軍でも、各科の志願兵の知能測定とか、体力測定とか、適性検査は行われました。産業界でも適性テストなどいわれましたが、ほとんど発展していません。戦後でも、日本リクルートなどで適性研究が行われていますが、さほど進んでいるとは思えません。

岡本 世論調査は、戦前はほとんど行われていないわけですね。

兼子 世論調査はほとんどやられていないといえます。

岡本 ときどき利用されるのは、壮丁調査というのがありますね。あれは国がやっていたんですか。

兼子 陸軍が徴兵検査の折にやっていたわけですね。身体検査の折に意見調査のようなものをやっていたんですが、あれは全員にやっていたわけではないようです。

岡本 全員ではないようですね。

兼子 適当なサンプルでやっていたようです。全員にやるとしたら大変な仕事ですからね。どういうサンプル方式でやったのかはわかりません。

岡本 先ほどお話あったように、心理学では態度測定の尺度については戦前からいろいろな蓄積があるようですけれども、サンプリングについてはほとんどないのですね。

兼子 ないようです。

岡本 戦前の意見調査みたいなもので、われわれが目にする研究報告はほとんどない。社丁検査以外には、東大宗教学の姉崎先生の宗教の研究。宗教意識とか、労働意識とか、断片的ですけども、若干ありますね。

兼子 「心理学研究」の中に幾つかの発表があります。その中で、態度調査については2つほど挙げました。社会調査による研究も全然ないわけではない。「思想調査について」という特集があったりして、調査したものはあるのですが、しかし、統計的観点のある論文というのはほとんどないです。

教育心理学の方面では、社会調査の考え方ではなく、子供の研究という意味合いで、小学生300人に対してアンケートをやってみたらこういう意見であった、というものはあります。

岡本 話は少し変わりますけれども、先生が東大の心理へ入られたのは昭和3年ですか。

兼子 そうです。

岡本 そのころの一般の心理学のイメージはどうだったんですか。「心理学科」という名前はもうあったわけですね。

兼子 ええ、ありました。心理学科というのは、心理学の実験室を建てたときに松本先生が独立させた。その前は哲学の中の一分野という形だったわけですよ。

社会学はいつから独立の学科になったのでしょうか。

岡本 講座自体は古いですけども、「学科」になったのは新しいんじゃないですか。戸田先生あたりが最初の……

兼子 その時期は、おそらく一緒なのでしょう。それまでは哲史文ぐらいの大きな区分けしかなかった。

岡本 そのころですと、社会学というのは何をやる学問
 だか、一般の人には全然イメージがなかったわけですが
 けれども、心理学は……。

兼子 心理学はそうでもなかったでしょう。それは実験
 心理学ということでしょう。ですから、半分は生理学の
 ようなものであるぐらいの感じだったと思います。社
 会心理学というイメージはなかったのです。アンケート
 調査でというのでは実験にならない。これがアカデミッ
 クなイメージで、一方、世間一般の理解では、催眠術と
 か、人の心を読む能力といったイメージ。

岡本 そうすると、先生も、最初は実験心理学的なこ
 とをやっておられたわけですね。

兼子 そうです。

岡本 そのころは、社会心理学的なものは、ほとんどだ
 れもなまっていなかったわけですか。

兼子 しかし、私どもが入ったときには、桑田芳蔵先生
 は社会心理学の講義を持っておられたですよ。

社会心理学の日本での、あるいは外国までも含めてで
 すが、大日本図書で出している、「社会心理学」という表
 題の叢書の最初のノ章で、日本の社会心理学の歴史みた
 いなものを私が書いています。簡単なものですがけれど
 も、その中で、社会調査についても若干は触れましたけれど
 も、あまり詳しくはやってありません。

岡本 戦後は、心理学を企業などでもいろいろ応用され
 るようになったわけですが、戦前は、応用する主
 体としては、軍ぐらいしかなかったわけですか。

兼子 あまりなかったと思います。一時、産業心理も民
 間の企業が取り上げ出した時期があったのですけれど

岡本 いつごろですか。

兼子 大正末から昭和の初期のころまでの経済成長期です。まだ統制経済的な思想が入ってこないうちです。

日本の産業は、もともとはアメリカからの影響もあったのでしょう。賃金制度なんか、請負制的なウェージシステムなんかがあった。そのころですと、いろいろな能率問題だとかなんとかというのが、工夫次第で非常に動かし得たわけですから。だからやる気にもなっていて、いろいろな能率心理学というものが出てきたわけですから。それにかかろうとしているぐらいのうちに、賃金制度なども統制的な形になってしまっていて、お役所と同じような固定給的なものに切りかえられてしまった。そうすると、能率研究もなくなってしまいました。

岡本 そうすると、能率研究といいますが、そういう作業研究みたいなものは、途中でストップした感じなんですか。

兼子 そのような感じですね。

作業研究、時間研究という形で日本に入ってきたテーラーシステムの作業管理。それに伴って賃金管理なども民間企業を、海軍工廠や国鉄あたりがリードしていたのですが、その中に適性問題もあるので、心理学の方もそれに入って伸びてきていたわけですから。私も海軍技術研究所の中の心理研究も、もともとはテストとか、兵隊の訓練とか、そういう方でスタートしていたものなのですが、私が入ってからは、工場の中の作業研究、工学的な研究、作業能率研究をやってくれというようなことで、研究員の分担を分け、術科学校の教育訓練を研究する人、採用のテスト研究を担当する人、知覚実験などをやる人

と各部門を分けて、いろいろな研究を同時並行的に進めるようにしました。こうして作業研究とか、職務分析のような問題をやる班をつくりましたが、戦時統制が進むとやめてしまいました。

岡本 それでは、大分時間も過ぎておりますので、この辺にしたいと思います。どうもありがとうございました。